

# 「分析化学」誌の将来：日本語で書く 科学技術論文



渋川 雅美

「分析化学」誌の編集委員長を仰せつかって1年が経ちました。本誌は1952年に創刊以来、今年で67巻に達している伝統ある学術論文誌で、現在も毎月1号の刊行を休むことなく継続しています。この1年間本誌の編集に携わって、和文論文誌の存在意義と日本語で科学技術論文を書くことの意味について考えさせられることが多くありました。その一端について、現在考えていることを述べさせていただきます。

研究論文の執筆は、研究という一連の総合的な作業における最後の重要なプロセスであり、得られた研究成果を社会で共有するために、分かりやすい文章にして発信しなくてはなりません。しかし、研究成果を世界に広く知ってもらうためには、日本語ではなく英語で論文を執筆する必要があります。このため原著論文の多くが、和文誌ではなく英文誌に投稿され、原著論文の掲載を主目的とする和文誌の存立が危うくなってきているのは当然のことといえます。分析化学誌はこのような流れを早くから見通し、原著論文である「報文」だけでなく、分析技術や分析データの報告を目的とした「技術論文」、「アナリティカルレポート」、および「テクノレポート」や、特定の主題または分野に関する総合的な解説である「総合論文」や「分析化学総説」を設けてきました。前者は特に国内産業界における分析技術の進歩と伝承、また後者は第一線の研究者だけでなく周辺分野の研究者や技術者にとって先端研究の動向を把握するのに大きく役立っているものと思います。これは過去1年間の全文PDFのダウンロード数が157,000件に達していることや、年間ダウンロード数が1位から10位の内訳が、総合論文3、報文2、分析化学総説2、ノート2、技術論文1と、論文種別がバラエティーに富んでいることにも現れています。

さて、最初に述べたように、現在ほとんどの原著論文は英語で発表されていますが、私たちの多くは科学を日本語で学び、博士論文はともかく、最初の研究論文である卒業論文は日本語で書くことが多いのではないのでしょうか。そのようなとき、日本語で書かれた優れた論文があると、論文執筆の指針を与えてくれる良いお手本となることでしょう。実際に私の研究室でも、多くの（特に真面目な）学生が卒業論文や修士論文をまとめる際に分析化学誌の論文を参考にしています。さらに英語論文を書く上でも、“良い日本語でよい文章を書く能力を持つことが必要な条件である”とされており、日本語でよい文章を書くことの意義とその技術の説明に1章を充てている英語論文の書き方の指導書すらあります（「化学者のための英語報文の書き方」（化学同人））。すなわち、優れた和文論文は、論理的思考力および表現力を育てるためにもなくてはならないものといえましょう。

分析化学編集委員会では、美しい日本語で書かれた優れた分析化学の研究論文を世に出すために、審査員の方々の協力をいただきながら編集委員一同多くの努力を払っております。より多くの方に読まれ、役に立つ和文論文誌を目指して、4月よりWeb投稿方式に変更するとともに審査を迅速に進めるシステムに刷新します。ぜひ多くの皆様から投稿をいただき、よりよい論文の掲載を支援していきたいと思っております。

〔Masami SHIBUKAWA, 埼玉大学大学院理工学研究科, 「分析化学」編集委員長〕